幸せな顔

渡邊　政治

茂は目を覚ました。電車は雨の中を走っている。胸には大きな花束、送別会で部下たちから贈られたものだ。高校を卒業して四十二年間勤めた銀行、仕事だけが生きがいだった。向かいの窓に老いた自分が映っている。その茂の手には紙が握られている。スナック「叶え」、みんなと別れてからほんの出来心で立ち寄った店。その店のママの名刺。水割りを作りながら

「この名刺に望みを言うと叶うのよ」とママは言った。

茂は名刺に一つの願いごとをした。

電車がホームに止まる。改札を出ると駅前で背伸びをした。

「寒い」

十二月二十五日、雨は雪に変わるだろう。

「お父さん」後から声がした。

振り向くと娘の留美が傘を持って立っている。妻の淳子も。

留美は傘を開くと私の横に立ち雨を防いでくれた。淳子も傘を差し、私を真ん中に三人並んで駅から歩き出た。留美の手を背中に感じる。願いが叶った。こうやって三人で歩きたかった。留美が私のほうを向き

「お父さん、長い間ごくろうさん。そしてありがとう。ここまで育ててくれて」高校二年生の留美からそんな言葉を言われるとは、目頭が熱くなった。

「あなた、お勤めごくろうさま。これからもよろしく」

「淳子、お前までなんだ。照れくさいよ」そう言いながら涙をぬぐった。留美は中学生のころは茂を疎んじていたが、茂が胃がんで入院すると少しずついつもの留美に戻っていった。幸い転移もなく無事この歳まできた。

「ありがとうは私の方が言うべきだ。二人とも仕事一筋の私をよく支えてくれたね。本当にありがとう」

朝、雪のうっすら積もった公園のベンチに花束を抱えた老人が座っていた。巡査が近くに住む宮地茂であることを確認した。

「家族に連絡を」年嵩の警官が言う。

「家族はいません。奥さんとお嬢さんがおられたのですが一五年前に自動車事故で亡くされています」

「一人暮らしか。それにしては幸せそうな顔をしているな。仏さん」そういうと年嵩の警官は署に連絡を取り始めた。